

氏名	伊永好見（これなが よしみ）
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	甲第17号
学位授与年月日	平成26年3月14日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	『源氏物語』解釈の諸相
	論文審査委員
	主査 准教授 新美哲彦
	副査 教授 八重樫直比古
	副査 工藤進思郎
	（元本学大学院文学研究科教授）

論文の内容の要旨

本論文は、注釈書の形成過程と宇治十帖の女主人公の表現方法という二つの観点から、『源氏物語』の世界を再構築する行為について考察したものである。

前者については、草稿が現存する注釈書を取り上げ、諸本整理と推敲課程の考察を行っている。後者については、先行研究の少ない大君・中の君の和歌を中心に考察し、続編における新たな表現方法を明らかにしている。どちらも先行研究を十分吟味した上に成り立った、革新的な論であり、新たな解釈の生成と、「続編」として物語を創出する行為についても十分考察されている。

本論文は2部4章より成る。

第1部、第1章では、宗祇著『源氏物語不審抄出』を取り上げ、計九本の諸本関係を明らかにした上で、ノートルダム清心女子大学所蔵黒川文庫の独自異文の特質を明らかにすることを試みている。その結果、語釈から宗祇の源氏注の特質である文脈重視の注に変わる箇所も確認でき、注釈作業の具体的な様相も考察されている。

第2章では、賀茂真淵著『源氏物語新釈』を取り上げている。本作品に関しては、本学附属図書館黒川文庫に草稿段階の真淵自筆書入れ『湖月抄』末摘花（一冊）と、特殊文庫蔵『源氏物語新釈』（七二冊）の二本を中心に考察している。本論文では、直接書入れ本に関しては、真淵が削除した注記の傾向を見ることで、次の段階の貼紙書入れ本の作成意識の一端を探っている。また、新出写本に関しては、書写者冬嶺の注について検討している。

第2部、第1章では、主に正編、「紅梅」「竹河」等と比較しつつ、宇治十帖特有の設定等について考察している。第1節では、結婚拒否という特異な志向をもつ女君である大君を描くために、正編の結婚を拒否できなかった落葉の宮の物語を援用していることを確認している。第2節では、「紅梅」「竹河」も含む「続編」以降に積極的に用いられている、女君を姉妹で描くという方法について大君を軸に考察している。

第2章では、設定という枠組みから一歩踏み込み、和歌的な表現の機能を探っている。第1節では、大君が贈答歌に用いる特徴的な歌語に着目し、大君と薫の贈答歌が徐々にズ

レを拡大させていく過程を考察している。第2節では、中の君の和歌について考察した。第3節では、中の君と薫の「朝顔」の贈答歌に着目し、朝顔が枯れて行く過程を描くことにより、薫の揺れ動く心情を描写するという繊細な表現が用いられていることを論じている。

以上の考察を通じて、前に書かれたものをいかに利用し、乗り越えていくかということについて、注釈書と続編の両面から、論者は緻密に検討し考察している。

論文審査の結果の要旨

〔審査結果の要旨〕

論文内容要旨にも記したごとく、本論文は、注釈書の考察と宇治十帖の考察の二つに大きく分かれる。

それぞれの論文が新見に満ちており、すでに公刊した論文に関しての学界の評価も高い。各論文の新見部分を取り上げて以下に評価したい。

第1部第1章では、宗祇著『源氏物語不審抄出』を取り上げ、計九本の諸本関係を明らかにした上で、ノートルダム清心女子大学所蔵黒川文庫本の独自異文の特質を明らかにしている。宗祇著『源氏物語不審抄出』は、現存諸本の整理が行われていなかった作品であり、本論文により、研究の基礎が築かれた。また、黒川文庫本は、他の諸本とは異なる本文を有しており、その位置づけが難しい本であったが、論者の考察により、他の諸本に先行する本文であることが明らかとなった。

なお第1章第2節は、「宗祇注の一形成過程—『源氏物語不審抄出』を通して—」（『文学・語学』第203号、2012年7月、全国大学国語国文学会）として公刊。

第2章では、賀茂真淵著『源氏物語新釈』に関して、本学附属図書館黒川文庫に草稿段階の真淵自筆書入れ『湖月抄』末摘花（一冊）と、特殊文庫蔵『源氏物語新釈』（七二冊）の二本を取り上げている。

『源氏物語新釈』も先行研究はあるものの、信頼できる諸本分類がなされていない作品であり、注記内容の変遷についての研究もほとんどなされていない。本稿により、初めて賀茂真淵注の生成、田安宗武の内容への関わりなどが知られた。また、新出写本の調査も学界に寄与すること大である。

第2部第1章では、大君と落葉の宮の比較と、姉妹物語の意識という新しい視点からの論である。

なお、「『源氏物語』宇治の大君論—落葉の宮物語から大君物語へ」（『清心語文』第10号、2008年7月、ノートルダム清心女子大学日本語日本文学会）、「宇治の大君論—姉妹物語の意義について—」（『工藤進思郎先生退職記念論文・随想集』2009年7月、工藤進思郎先生退職記念の会）としてそれぞれ公刊されている。

第2章では、和歌的な表現の機能に絞って考察している。大君と薫の贈答歌が徐々にズレを拡大させていく過程、中の君の和歌、中の君と薫の「朝顔」の贈答歌という、どれもこれまで十分に議論が深まっていなかった視点からの論である。

なお第1節は「乖離する大君—薫との贈答歌を通して—」（『国語と国文学』第1064号、2012年7月、東京大学国語国文学会）として公刊されている。

本論文の秀れた達成に対して、すでに全国誌で公刊されているものも含め、いち早く一

書として公刊し、論議の対象とするべきであるというのが委員会の見解である。

以上より、本論考は博士（文学）を授与するに足るものであると判定する。

〔審査結果〕

2014年 2月12日、審査委員全員出席のもとに、当該論文の審査及び最終試験を行い、論文、最終試験ともに 合格 と判定した。

〔結 論〕

伊永好見氏は、本大学院に4年在学し、所定の単位を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、論文の審査及び最終試験に合格し、課程修了の要件を満たしたので、博士の学位を受ける資格があるものと認定する。